



## 農薬はいつから使われたか

平安時代に書かれた「古語拾遺」という本に、害虫に関する記載があるそうです。その駆除には、山椒や塩などを混ぜ合わせた物をまけとあります。が、効果のほどはどうだったのでしょうか。

江戸時代になると、タバコの煮汁や硫黄を燃やした煙が、使われたことがあったようです。一部の地域では鯨油を水田に注ぎ、油膜に触れた害虫が油にまみれて死ぬなどの方法も用いられました。

明治になると欧州で効果の認められた除虫菊の栽培が、日本でもおこなわれるようになりました。ほかにフランスから石灰硫黄合剤やアメリカから青酸、亜ヒ酸、硫酸ニコチンが入ってきました。

1938年、スイスで誕生したのがDDTです。戦後、駐留軍によって日本人のシラミ駆除のためにDDTが使われました。DDTは合成農薬とし



上 / 当時のDDT散布の様子



左 / アメリカで出版された「サイレント・スプリング」 右 / 翻訳された「沈黙の春」新潮社

下 / DDTの散布後にコマドリが死ぬと書かれた、友人からの手紙が執筆の動機だといひます。乳がんと戦いながら執筆したレイチェル・カーソン女史は出版から1年半あまりで亡くなりました



て初めて大量生産された殺虫剤です。

1940年代、DDTに刺激されるように化学的に合成された農薬が、次々に誕生しました。フランスではBHC（有機塩素系殺虫剤）、ドイツではパラチオン（有機リン系殺虫剤）などの農薬が開発されています。

これらの農薬は殺虫力が強く、長期間効果が続くため、日本でも広範囲に使用されました。

1944年にはイギリスで除草剤（2,4-D）が誕生しました。作物以外の雑草を枯らす除草剤の誕生は画期的なことで、手間のかかる雑草処理が楽になると、農家から大歓迎されました。

なお、ベトナム戦争で撒かれた枯葉剤は6割がこの2,4-Dと2,4,5-Tを混合したオレジン剤といわれる除草剤です。日本でも同じような除草剤が、散布されていたことになりました。

1960年頃、水田の雑草処理用に普及したのがPCPです。1962年、琵琶湖や有明海で大

量の魚が死亡しました。原因は大雨の影響で水田から流出したPCPでした。農薬が自然に害悪を与える可能性を初めて認識させた事件でした。

同年、アメリカの海洋生物学者レイチェル・カーソン女史が、DDTの人間への害や残留性が及ぼす環境汚染への危険を警告した「サイレント・スプリング」が出版されました。

この本は日本でも「沈黙の春」という題名で翻訳されて、大きな反響を呼びました。以降、農薬に対する意識が大きく変わり、1964年には食品に残留している農薬の検査が始まりました。

急速に普及した農薬は、毒性についての知識のない農家から多くの犠牲者を出しました。日本中で使用されたDDTやBHCの製造・販売・使用は、1981年によりやく禁止されました。

その後、低毒性の農薬の開発が進められて、古い農薬は徐々に姿を消していきます。1984年には「農薬取締法」が改正され、製造・輸入業者の登録と農薬登録時の各種毒性試験や自然界への残留試験などを義務づけています。

低毒性とはいっても使用した農薬は、作物に付着したり、内部に浸透したりして残留します。穀物や草を食べた家畜など、牛・豚・鳥肉からも農薬成分は検出されています。河川に流れ出た農薬はやがて海に注ぎ魚の体内に蓄積されます。

それらの農薬成分は食物連鎖で濃縮されて、やがて私たちの体内にも入ってきます。ひとつひとつの毒性は低くても、複数または他の添加物と合わさった場合の「複合汚染」も心配されています。

【次号に続く】